

黙示録12章 「イスラエルを巡る霊の戦い」

1A 子を産む女 1-6

1B 天のしるし 1-3

2B 男の子 4-6

2A 投げ落とされる竜 7-12

1B 天における戦い 7-9

2B 兄弟の告発者 10-12

3A 逃れの荒野 13-18

1B 洪水を飲み干す地 13-16

2B 女の子孫 17-18

本文

黙示録 12 章を開いてください。私たちは今、神の救いのご計画にとって、要になっている預言について学んでいっています。力強い御使いが開かれた巻き物を手に持って、それを使徒ヨハネに渡しました。そこには、第七のラッパが吹き鳴らされた時に、預言者たちに知らせておいた神の奥義が成就する時になるということでした。主が前もって預言者に語っておられたことが、ここにおいて一挙に明らかにされるということです。

そこで私たちは前回、エルサレムの神殿についての幻を読みました。主は、ご自分がご自分の民と共に住むということを最も大きな願いとしておられます。地上の幕屋から始まり、エルサレムにご自分の名を置くところとして住まいを定められました。しかし、神殿はバビロンに破壊され、またローマに破壊されました。しかし、ローマに破壊されていても、主は確実に、御霊によって教会をご自分の住まいとされ救いのご計画を進めておられます。そして、再び戻られる時にエルサレムにおける神殿を再建されます。ところが、反キリストは多くのユダヤ人たちを契約を結び、神殿でのいけにえをささげることができようにされます。それは妥協の産物であり、実にエルサレムはソドムやエジプトのような霊的退廃が広がっていました。そこで二人の証人が現れ、預言をして、火を噴いてしるしを行ないます。反キリストが死んでいたようになっていたけれども、生き返って、底知れぬ所から出て来て、二人を殺します。しかし、二人は三日半の後に生き返り、立ち上がって天に引き上げられます。そして、反キリストは聖所に入って、いけにえをやめさせて、自分が神であると宣言します。その詳しいことは、13 章に入ると出て来ます。その神殿が偽物であったことが、暴露される瞬間です。しかし、主が戻ってこられて反キリストを倒されます。そして地上に神殿を建てられ、ご自身がそこで王として君臨されます。

このように、神の宮という救いにとってとても大切なことにおいて、戦いが起こることが分かりま

した。12章では、私たちに救い主キリストをもたらしたイスラエルについての預言になります。主は、人々を救われようとする時に、アブラハムに対して、「地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。(創世 12:3)」と言われました。アブラハムの子孫であるイスラエルから、キリストがもたらされ、そしてキリストによって全ての民族が祝福を受けます。それゆえ、神の救いのご計画を阻む勢力は、イスラエルに対して攻撃をしていきます。

1A 子を産む女 1-6

1B 天のしるし 1-3

1 また、巨大なしるしが天に現われた。ひとりの女が太陽を着て、月を足の下に踏み、頭には十二の星の冠をかぶっていた。

「巨大なしるし」であります。こうした徴が、12章と13章に現れます。初めに出て来たのが、この女の徴です。この存在について、私たちは悩むことなく誰であるかを知ることが出来ます。創世記37章です。ヤコブの子ヨセフが夢を見て、それを家族に話している場面です。一つは、畑の束の夢でしたが、二つ目が、この太陽と月と星の夢でした。9節を読みます。「ヨセフはまた、ほかの夢を見て、それを兄たちに話した。彼は、『また、私は夢を見ましたよ。見ると、太陽と月と十一の星が私を伏し拝んでいるのです。』と言った。」この夢の話聞いて、兄たちだけでなく、父ヤコブも怒りました。なぜなら、太陽は自分のこと、月は母親ラケルのこと、そして11の星は、ヨセフ以外のヤコブの息子たちを表していたからです。ですから、この女がイスラエル民族を表しています。

そしてイスラエルは、聖書の中で主なる神に対する妻として描かれています。例えば、エレミヤ3章には、イスラエルの神ではない外国の神々を拝むイスラエルのことを、淫行を働いている不貞の女にたとえられています。ちなみに、教会は、婚姻を待っている花嫁としてたとえられていますし、また、神に反抗する霊が、黙示録17章で、大淫婦としてたとえられ、神と自分との関係が結婚関係に例えられています。

2 この女は、みごもっていたが、産みの苦しみと痛みのために、叫び声をあげた。

もう少し先を読めば、彼女がみごもっている子はイエス・キリストであることが分かります。イエスを産むに当たって、イスラエルが産みと苦しみと痛みをとまっています。これは、どのような痛みなのでしょう？ダニエル書を読みますと、ユダヤ人のバビロン捕囚後の、世界史が預言されていますが、バビロンからメディア・ペルシヤ、メディア・ペルシヤからギリシヤ、そしてローマへと続きます。それぞれの時代にてユダヤ人は苦しみを受けてきましたが、ローマ時代は、鉄の支配であり、反逆者には容赦ない制裁が加えられる時代になりました。当時のことを「パックス・ローマ」と呼びますが、戦争がなくなり平和になったということです。それはローマが、ことごとく当時の国々を掌握し、自治を認めながらも税金や軍隊によって支配していったからです。ユダヤ人たちが、

ローマ時代に出てくるメシヤ、ネブカデネザルが見た人の像の、足と部分をことごとく打ち砕く石、メシヤを待ち望んでいました。圧制からの解放者の約束を待ち望んでいたのです。

その時が満ちた時に、主が来られました。ですから、民のメシヤに対する待望には、私たちの想像を超える期待がありました。バプテスマのヨハネがもしかしたらキリストではないか？とあって、広域からバプテスマを受けていましたし、主ご自身の宣教にも全国から人々が主のところへやって来ました。その時に終わりが来ると真面目に思っていたのです。

3 また、別のしるしが天に現われた。見よ。大きな赤い竜である。七つの頭と十本の角とを持ち、その頭には七つの冠をかぶっていた。

女の徴の次は、「大きな赤い竜」の徴です。女と同じように、竜も天において現れています。彼の正体は、9 節を読むと出てきます。「この巨大な竜、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇」です。悪魔です。竜というのは架空の動物と言われていますが、聖書には実在の生き物として描かれています。ヨブ記 41 章に「レビヤタン」という動物が出てきます。その描写を読むと、いわゆる竜のような動物であり、またそれは悪魔の描写だとも言えます。そして、イザヤ 27 章 1 節には、「その日、主は、鋭い大きな強い剣で、逃げ惑う蛇レビヤタン、曲がりくねる蛇レビヤタンを罰し、海にいる竜を殺される。」エバを惑わしてから、蛇は地を這うようになりましたが、もしかしたらその前は、竜のようであったのかもしれない。そしてこの竜は、「赤い」のですが、それは怒り狂って、血を流していく流血の血の色ではないかと考えられます。

そして、竜は、「七つの頭と十本の角とを持ち、その頭には七つの冠をかぶっていた。」とあります。これは、次の章 13 章においてこれが獣の姿であり、それから 17 章においてその秘儀の意味するところが解き明かされます。私たちは既にダニエル書 7 章において、ローマであり、復興ローマでもある第四の獣に若干似ていることに気づくことができるでしょう。13 章にて、これが反キリストであることが分かります。つまり、反キリストを支配している、霊的な存在が悪魔であるということです。コリント第二 4 章 4 節にはサタンは「この世の神」と呼ばれていますが、国々の行なっている横暴なことの背後には、サタンが働いています。覚えていますか、ダニエル書 10 章において、ペルシヤを動かしている「ペルシヤの君」の存在、ギリシヤを動かしている「ギリシヤの君」の存在がありました。王たちがユダヤ人に対して迫害を行なうも、その背後には悪の天使、墮落した天使の存在があることを知りました。私たちが見ている世界の背後に、このように霊の戦いがあるということを知る必要があります。

2B 男の子 4-6

4a その尾は、天の星の三分の一を引き寄せると、それらを地上に投げた。

「天の星」ですが、聖書では「星」はしばしば、天使のたとえとして使われています。例えば、この黙示録でも、イエス様の右の手の中にあった七つの星は、七人の御使いであるとありました(1:20)。今サタンが、天使の三分の一を自分のところに引き寄せ、そしてそれらを地上に投げました。サタンは、イザヤ書 14 章に出てくるルシファー、またエゼキエル書 28 章に出てくる守護者ケルブであると言われています。彼はもともと大天使でしたが、自分の美しさに高ぶり、高慢になった神より高くなろうとしました。そこで神は、彼を天から地へと投げ落とした、とあります。悪魔は、自分が投げ落とされて、それから、天にいる三分の一の天使を自分の味方につけたと思われます。それら墮落した天使が、聖書で「悪霊」と呼ばれているものではないかと考えられます。

竜が、「地上に投げた」とのことですが、暗闇の中に閉じ込めることが神の御心でした。「また、主は、自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められました。(ユダ 6)」けれども、竜がこの墮落した天使どもを地上に投げたことによって、地にも徘徊するようになりました。ですから、レギオンにイエス様が対峙された時に、「悪霊どもはイエスに、底知れぬ所に行け、とはお命じになりませんようにと願った。(ルカ 8:31)」と言いました。そのおるべき場所に閉じ込められることを非常に恐れていました。そこでイエス様が宣教活動されていた時は、次から次へと悪霊付きが出てきます。主が来られたのは、そうした「捕われ人には解放を、囚人には釈放を告げ、主の恵みの年」を告げるとあります(イザヤ 61:1-2)。主が地上に来られることにおいて、竜がこれら星を地上に投げつけたことによって起こっていることなのではないかと考えられます。

4b また、竜は子を産もうとしている女の前に立っていた。彼女が子を産んだとき、その子を食い尽くすためであった。

この出来事は、マタイ 2 章 16 節に出てくるヘロデ王の幼児虐殺のことです。こう書かれています。「その後、ヘロデは、博士たちにだまされたことがわかると、非常におこって、人をやって、ベツレヘムとその近辺の二歳以下の男の子をひとり残らず殺させた。その年令は博士たちから突き止めておいた時間から割り出したのである。」イスラエルの子孫マリヤから産まれたイエスは、国の支配者ヘロデの背後で働く悪魔によって、滅ぼされそうになったのです。これまでもイスラエルは、子を根絶やしにする危機に遭いました。アブラハムに対して、「あなたの子孫によって、全ての民が祝福を受ける」との約束があったためです。その前にアダムとエバに対して、「女の子孫が、蛇の子孫の頭を砕く」という約束があったからです。エジプトにおいて、男の子がみなナイル川に投げ入れられる危機がありました。エステル記では、ハマンがユダの民を根絶やしにする危機がありました。そうしたことは、全て女が産む子を食い尽くすためでありました。

5 女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖をもって、すべての国々の民を牧するはずである。その子は神のみもと、その御座に引き上げられた。

この鉄の杖による、諸国の統治から、男の子がイエス・キリストであると分かります。黙示録 19 章に、白い馬に乗って、諸国の軍隊と戦われるイエスさまの姿があります。15 節にこう書かれています。「この方の口からは諸国の民を打つために、鋭い剣が出ていた。この方は、鉄の杖をもって彼らを牧される。」イエスさまは地上に戻られて、正義によって世界を支配されます。この方に反逆する者は鉄の杖でことごとく滅ぼされます。詩篇二篇には次の預言があります。「わたしは主の定めについて語ろう。主はわたしに言われた。『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。あなたは鉄の杖で彼らを打ち砕き、焼き物の器のように粉々にする。』」（詩篇 2:7-9）」悪魔が男の子を滅ぼす仕業は失敗しました。この方が十字架に付けられ、その時も暗闇の力が働いていましたが、主は甦られました。その悪魔の仕業でさえ、神の永遠の救いのご計画の中で折り込み済みだったのです。そして、主は甦られて、四十日後に天に昇られました。

ここに、「その子は神のみもと、その御座に引き上げられた。」というところに、詩篇 110 篇 1-2 節の思いが込められています。「主は、私の主に仰せられる。「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは、わたしの右の座に着いていよ。」主は、あなたの力強い杖をシオンから伸ばされる。「あなたの敵の真中で治めよ。」主は、父なる神の右の座に着いておられます。そして執り成しをしておられます。けれども、それはしばらくの間だけで、必ず立ち上がられて、万物をご自分の支配の中に置かれます。

6 女は荒野に逃げた。そこには、千二百六十日の間彼女を養うために、神によって備えられた場所があった。

イエス様の昇天後に起こる出来事です。しかし、その始まりがダニエル書 9 章の七十週の預言で学びましたように、かなり長い期間になっています。その間に神は異邦人の間で聖霊の働きを行われ、イスラエルに対する神の祝福に異邦人を加える教会を建ててくださいました。今もその働きが続いています。けれども、9 章 27 節に、「彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせる。荒らす忌むべき者が翼に現われる。」とありました。最後の七十週目がこの契約をもって始まります。その半ばに、彼が契約を破り、荒らす忌むべきことを行なっていきます。その時に、女つまりイスラエルが「女は荒野に逃げ」ることを行ないます。期間は、「千二百六十日」であります。すなわち三年半の間、「ひと時、ふた時、半時」であります。イエス様がオリーブ山で言われました。「マタイ 24:15-21 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば、(読者はよく読み取るように。)そのときは、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。屋上にいる者は家の中の物を持ち出そうと下に降りてはいけません。畑にいる者は着物を取りに戻ってはいけません。だが、その日、悲惨なのは身重の女と乳飲み子を持つ女です。ただ、あなたがたの逃げるのが、冬や安息日にならぬよう祈りなさい。そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれか

らもないような、ひどい苦難があるからです。」13 節以降に、このことについて詳しく書いていますので、そちらで取り扱います。

2A 投げ落とされる竜 7-12

1B 天における戦い 7-9

7 さて、天に戦いが起こって、ミカエルと彼の使いたちは、竜と戦った。それで、竜とその使いたちは応戦したが、8 勝つことができず、天にはもはや彼らのいる場所がなくなった。9 こうして、この巨大な竜、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇は投げ落とされた。彼は地上に投げ落とされ、彼の使いどもも彼とともに投げ落とされた。

ヨハネは、天における巨大なしるしを二つ、女と赤い竜を見たあと、天における戦いの場面を目撃しました。竜すなわち悪魔と戦っているのは、大天使ミカエルとその他の天使たちです。ミカエルは、ダニエル書によるとイスラエルの君です。(ユダ書 9 節においても、イスラエルの指導者モーセのからだについて、ミカエルが悪魔と論じています。)そしてダニエル書 10 章には、イスラエル人たちとともに奮い立って、ペルシヤの君やギリシヤの君と戦うのはミカエルしかいない、と書かれています(21 節)。そして、ハルマゲドンが起こったその最終場面で、ミカエルがイスラエルを守るために立ち上げることが書かれています。「その時、あなたの国の人々を守る大いなる君、ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来、その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る。しかし、その時、あなたの民で、あの書にしるされている者はすべて救われる。(12:1)」イスラエルは大患難において、これまでにない苦難を味わいますが、ミカエルが立ち上がることによって彼らは救われます。

そして、ここで悪魔は天から投げ落とされました。ここで、どの時点で彼が投げ落とされたか、考えてみたいと思います。イザヤ書 14 章や、エゼキエル書 28 章に投げ落とされたことが書かれています。悪魔は天ではなく、地上のエデンの園で蛇として現われました。けれども、ここでは患難期にて悪魔が地上に投げ落とされることについて書かれています。全体を総合すると、悪魔は次のような経路を辿ったものと思われる。

初めは、神の御座のところにはいました。神のそばにいる御使いとして、その栄光と美しさは際立っていました。それから神に反抗してその場から追い出されました。その場所は、「空中」とも呼ばれる、神の御座がある天でもない、また地上でもない中間の空間のようなところです。エペソ書 6章12節に、私たちの格闘は血肉に対するものではなく、「主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」とあります。ここですと、悪魔はいまだ、神に近づくことができるようです。ヨブ記 1章を読みますと、地を巡っていたサタンが主の前に立っていることが書かれています(1:6-7)。しかし空中にいる悪魔が、患難時代の半ばに、ミカエルとの戦いに負けて天から投げ落とされ、そして地上に行きます。次回、同じ大患難時代の半ば

に、死んだのに生き返る反キリストが、竜の権威と位と力をもって現われることが書かれています。悪魔が地上で直接的に暴れまわります。それから、悪魔は再臨のイエス・キリストによって底知れぬ所に鎖つながれて、千年間つながれます。そして一時的に解き放たれますが、その後、ゲヘナ、火と硫黄の池に投げ込まれます。

2B 兄弟の告発者 10-12

10a そのとき私は、天で大きな声が、こう言うのを聞いた。「今や、私たちの神の救いと力と国と、また、神のキリストの権威が現われた。

この歓声は、前回の学び 11 章 15 節にも出てきました。「第七の御使いがラツパを吹き鳴らした。すると、天に大きな声々が起こって言った。『この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった。主は永遠に支配される。』」このときの歓声は、この世の国々がキリストの力と権威に服することが書かれていますが、ここでは霊的存在である悪魔とその手下がキリストの力に服します。この世の国々の背後に悪魔が働いていますから、国々が裁かれる時に悪魔が裁かれるのです。

彼らはこのことを、「神の救い」と呼んでいます。神の救いとは、個々の魂の罪が赦されて、罪と死、また神の怒りから救われるということだけではありません。人々が、悪魔の支配から御子の支配の中に移されることを言います。「コロサイ 1:13-14 神は、私たちが暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。この御子のうちにあつて、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。」パウロが、イエス様から言われた言葉をヘロデにこう伝えました。「使徒 26:18 それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中にあつて御国を受け継がせるためである。」

10b 私たちの兄弟たちの告発者、日夜彼らを私たちの神の御前で訴えている者が投げ落とされたからである。

今さっき言及したヨブ記 1 章のことを思い出してください。サタンはヨブのことを神の前で告発しました。ヨブが主を恐れるのは、祝福されているからで、あなたよりも祝福の方が大事なんだよ、と訴えたのです。悪魔は兄弟たちの告発者です。一方、私たちの主、イエス・キリストは弁護者です。ヨハネの手紙第一 2 章 1 節にこう書いてあります。「もしだれかが罪を犯したら、私たちには、御父の前で弁護して下さる方があります。それは義なるイエス・キリストです。」

私たちは、もっともすぐれた弁護士がいます。イエスさまという弁護士です。有名なローマ 8 章の後半にも、サタンとの確執が背景にあります。ローマ書は信仰による義がその主題ですが、その部分で攻撃するサタンに対する言葉をパウロは書いています。「8:31-39 では、これら

のことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしてくださるのです。私たちがキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」と書いてあるとおりです。しかし、私たちは、私たちが愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちが引き離すことはできません。」ここでは、患難や迫害、困難に遭っている時に、主がなおのこと神の愛によって私たちを守ってくださることが書かれています。今、ここでも患難の中にある兄弟たちを告発しているサタン姿であります。

11 兄弟たちは、小羊の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼に打ち勝った。彼らは死に至るまでもいのちを惜しかなかった。

この兄弟たちは患難時代に殉教した人たちですが、今のキリスト者にも同じことが言えます。私たちが悪魔に打ち勝つには、いやすでに打ち勝つことができているのは、何でしょうか？一つは、「小羊の血」です。小羊の血が、私たちの罪を完全に洗い清め、罪を私たちから拭き去ることができます。悪魔は私たちを告発します。しかし、そのとき、私たちはこう祈りましょう。「私が、こんなにひどい罪人であるのはそのとおりです。だから、主よ、あなたはこの私のために、十字架につけられて、血を流されました。」そのときに、悪魔は逃げ去ります。私たちが罪に定めようとする悪魔は、決して私たちに触れることはできません。そして、私たちが主にお仕えできるその良心を清く保つことができるのは、唯一、流された血潮なのです。「イエス・キリストに従うように、またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人々へ。(1ペテロ 1:2)」

それから、「自分たちのあかしのことば」です。これは、単に自分の救いのあかしをする、ということではありません。神から与えられた良心にしたがい、脅されても、何をされても、キリストを主として心であがめることです。「彼らの脅かしを恐れたり、それによって心を動揺させたりしてはいけません。むしろ、心の中でキリストを主としてあがめなさい。そして、あなたがたのうちにある希望について説明を求め人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしていなさい。(1ペテロ 3:14-15)」そして、その証しを立てることで、霊的な力と権威が現れます。隠したところには、現れません。キリストの告白はこうも大切なのです。「ですから、わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。しかし、人の前でわたしを知らないと

言うような者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。(マタイ 10:32-33)」

そして彼らは、「死に至るまでもいのちを惜しまなかった」とありますが、サルデスの教会に対してイエス様が、「死に至るまで忠実でありなさい」と命じられました。私たちは、日々、自分のいのちを捨てる生活を歩んでいます。

12 それゆえ、天とその中に住む者たち。喜びなさい。しかし、地と海とには、わざわいがある。悪魔が自分の時の短いことを知り、激しく怒って、そこに下ったからである。」

天に住む人々と、地と海に生きるものとの対比です。天では歓声が湧き起こっていますが、地では災いが極みに達します。そして、悪魔が激しく怒っているのは、自分の時が短いことを知っているからだ、とあります。「最後のあがき」です。彼はキリストが来られて、自分が底知れぬ所で鎖につながれる時が近づいていることを知っているのです。私たちは、悪魔のしわざを至るところに見ます。悪魔が私たちを滅ぼうと、ライオンのように徘徊しています。けれども、それは、悪魔のあがきであることに気づいてください。私たちが霊的に前進すれば、必ず攻撃してきます。自分の領域が神の御霊によって脅かされているからです。けれども、私たちは彼の恫喝に対して、怯えるのではなく、むしろ「攻撃は最大の防御」と言われるように、さらに攻めていけば良いのです。

3A 逃れの荒野 13-18

1B 洪水を飲み干す地 13-16

13 自分が地上に投げ落とされたのを知った竜は、男の子を産んだ女を追いかけた。

ここに、人類の歴史の中で起こっているある謎について、その回答を見ることができます。なぜユダヤ人がこんなにも迫害されてきたのか、ということについての回答です。それは、「悪魔」です。悪魔は、神のご計画を台無しにするために、神が選ばれた民イスラエルを滅ぼそうとしているからです。なぜあのような恐ろしいホロコーストが起こったのか。だれも止めることができなかったのか？私は質問されたことがあります。その時、「ユダヤ人は、ホロコーストだけでなく、これまで数々の迫害や虐殺を受けてきている。実はイスラエルは、迫害から生まれた民族だ。」と説明します。イスラエルがエジプトから脱出したとき、その時に民族として誕生したのですが、そのきっかけは、パロがエジプトに住むイスラエル人が多産であり、強くなっていったのを恐れたからです。そこで彼らに苦役を課しましたが、なんと、苦しめれば苦しめるほど、彼らはさらに多くの子を産んでいきました。そこで幼子をナイル川に投げ込むという虐殺命令を出しました。

それ以来イスラエルは、常に外敵に襲われる危険の中にありましたから、敵から救われることが、すなわち自分たちの救いであると考えようになりました。けれども、イスラエルが神に反抗し偶

像を拝むようになって、神はイスラエルを裁かれ、アッシリヤ、バビロンなどによって捕え移されるようにされました。これらイスラエルに敵対した国々は、イスラエルへの神の裁きの器として用いられたのですが、けれども預言者たちは、これらの国々はイスラエルに悪を行なったから、そのことによって滅ぼされると宣言されました。エレミヤ書 50-51 章にそのことが詳しく書かれています。反ユダヤ主義を私たちはどのようにしても、正当化することはできません。私たちユダヤ人でない者たちに対するメッセージは、「イスラエルは神のひとみであり、これに触れる者は神の怒りを買う。」ということです。

14 しかし、女は大わしの翼を二つ与えられた。自分の場所である荒野に飛んで行って、そこで一時と二時と半時の間、蛇の前をのがれて養われるためであった。

女すなわちイスラエルは、「大きな翼」が与えられました。これは、出エジプト記 19 章 4 節などで出てくる言葉ですが、イスラエルが外敵から守られることを表しています。ユダヤに住む人々は、自分の正体を表した反キリストから逃げるために、山々に逃げます。そして荒野に逃げます。この場所は、聖書で預言されています。一つはイザヤ書 16 章 1 節です。「子羊を、この国の支配者に送れ。セラから荒野を経てシオンの娘の山に。」ここのセラとは、ボツラの辺り、かつてのエドムの地です。さらに、ミカ書 2 章 12 節にはこう書いてあります。「ヤコブよ。わたしはあなたをことごとく必ず集める。わたしはイスラエルの残りの者を必ず集める。わたしは彼らを、ボツラの羊のように、牧場の中の群れのように一つに集める。こうして人々のざわめきが起ころう。」イスラエル人たちの多くは、ボツラと呼ばれる地域に逃げて行きます。今は、「ペテロ」と呼ばれている町、かつてのナバタイ王国の首都の遺跡のあるところ。そこで神によって、「一時、二時、半時」すなわち三年間半守られます。

15 ところが、蛇はその口から水を川のように女のうしろへ吐き出し、彼女を大水で押し流そうとした。16 しかし、地は女を助け、その口を開いて、竜が口から吐き出した川を飲み干した。

この「水」は軍隊のことを表しています。ダニエル書 9 章 26 節に、ローマ軍がエルサレムを滅ぼしてから洪水が起こると書かれていますが、それは諸国の軍隊がエルサレムを荒らすことを意味しています。

そして、ここはハルマゲドンの戦いの一部が書かれているダニエル書 12 章には、反キリストの手から、エドムとモアブ、またアモン人が逃げるとあります(43 節)。反キリストが率いる戦いにおいてこの地域だけは免れるようで、イスラエル人も助かるようです。しかし、最後はここにいる人々も攻められます。「わたしは自分にかけて誓ったからだ。…主の御告げ。…必ずボツラは恐怖、そしりとなり、廃墟、ののしりとなる。そのすべての町々は、永遠の廃墟となる。私は主から知らせを聞いた。「使者が国々の間に送られた。『集まって、エドムに攻め入れ。戦いに立ち上がれ。』」(エ

レミヤ 49:13-14)」そこでイスラエルは悔い改め、メシヤを求めます。するとイエスが天から、教会とともに戻ってこられます。そして、主は、ボツラにて諸国の軍隊と戦われます(イザヤ 34:6)。そしてユダヤ人を救われます。そして、エレミヤ書 30 章には、このことが「ヤコブの苦難」と呼ばれています。「ああ。その日は大いなる日、比べるものもない日だ。それはヤコブにも苦難の時だ。しかし彼はそれから救われる。(7 節)」イスラエルは苦難に遭い、ゼカリヤ書によりますと、三分の二のユダヤ人が死にます。「ゼカリヤ 13:8-9 全地はこうなる。..主の御告げ。..その三分の二は断たれ、死に絶え、三分の一がそこに残る。わたしは、その三分の一を火の中に入れ、銀を練るように彼らを練り、金をためすように彼らをためす。彼らはわたしの名を呼び、わたしは彼らに答える。わたしは「これはわたしの民。」と言い、彼らは「主は私の神。」と言う。」けれども、生き残った者たちは大勢主を信じ、物理的だけではなく、霊的にも救われるのです。

2B 女の子孫 17-18

17 すると、竜は女に対して激しく怒り、女の子孫の残りの者、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを保っている者たちと戦おうとして出て行った。

悪魔は、イスラエルの民に対して完全に滅ぼすことができないのを知って、今度は、「女の子孫の残りの者」に対して攻撃をします。その子孫とは、「神の戒めを守り、イエスのあかしを保っている者たち」とあります。アブラハムの信仰に連なる、ユダヤ人だけでなく、異邦人も含めた者たちです。「神の戒めを守り、イエスの証しを立てる」ということが、如何に大切で、また悪魔の攻撃の標的にされているかがよく分かります。

18 そして、彼は海への砂の上に立った。

これは次の 13 章に出てくる話です。海とは世界の諸国のことで、そこから反キリストが登場しますが、彼は竜の権威を位と力を身にまといます。そして、一人一人の刻印を押し、それが無い者には、売ることも買うこともできないようにします。イエスさまを信じる人たちは刻印を押しされるのを拒否するでしょうから、経済活動ができないようにさせて悪魔はイエスのあかしを保つ者たちを苦しめ、殺すのです。

こうして、イスラエルに対する悪魔の仕業を学びましたが、彼らが攻撃されるのは、神に選ばれた民だからです。私たちクリスチャンも、キリストにあつて神に選ばれた存在です。ただ違うのは、イスラエルは自分が意図していなくても攻撃されるのですが、私たちは主体的な信仰とあかしによって、それで攻撃されます。私たちにはキリストにある希望があります。「迫害を受けるものは幸いです。天に報いがあるからです。」というイエス様のことばがあります。